

福島ロータリークラブ通信

4月30日(木)通信

去年の今日は平成最後の日でした。令和の新しい時代の幕開けに祝賀ムード一色でしたが、今年は外出自粛で世界が激変してしまいました。来年の今頃は春の陽気と共に穏やかな日常が戻ることを祈ります。皆様、どうぞ今週も豊かに過ごしてください。たっぷりあるおうち時間に合わせ、内容盛りだくさんでお届け致します。

丹治正博会員より寄稿

疫病退散の祈りに込められた意義

～閉塞感漂う今こそ、地域に寄り添う神社でありたい～

福島稲荷神社 宮司 丹治正博

新型コロナウイルス感染症の拡大が止まらない。文明と経済の発展により、人類はかつて無い豊かで便利な生活を享受する中、新種の感染症への無力さが露呈された感がある。

人々は日常の活動の自粛を求められる中、感染の恐怖に脅え、出口の見えない不安に悶々とした日々を送っている。更に、人との接触を極度に避けることで、人をみたら感染者と疑えという「心のささくれ」も起きつつある。

人類には有史以来、感染症との戦いを続けてきた歴史がある。海外では「ペスト」の流行を描いたフランスのカミュの小説、イタリアのマンゾーニの「婚約者(いいなづけ)」に当時の社会の混乱ぶりと人々の様子が克明に描かれている。

我が日本においても、自然災害による飢饉や疫病に繰り返し見舞われてきた歴史がある。我々の先人たちは、そうした危機にいかに対処したのであろうか。神話や地域に伝わる故事説話には、疫病退散にまつわる物語が多く見られる。その代表が「蘇民将来」(そみんしょうらい)の説話であろう。

八岐大蛇神話で知られる素戔鳴尊(スサノオノミコト)がその昔、みすばらしい姿で諸国を旅した際、貧しい暮らしの中、善行を施した蘇民将来という男に「世に疫病流行すれば、蘇民将来の子孫といい、茅の輪をつけておれば免れさせる」と約束された『備後国風土記』の説話である。全国の神社で行われる大祓行事に欠かせぬ「茅の輪(ちのわ)」もこの説話に由来し、現在でも関西の家庭では、疫病除けに「蘇民将来」のお神札を玄関に貼る習慣が残っている。

疫病退散を神明に祈る行為を非科学的と一笑に付す人が多いが、コロナ禍に際して不安に苛まれ右往左往する人々を見るにつけ、人間の心と身体は有史以来ほとんど進化していないことに気づかされる。戦後、我々は日本の良き習慣、自然、神性、伝統などを軽視しすぎてきたように思えてならない。かつて多くの戦国武将や、著明な経済人、政治家らは事ある度に神社に詣で祈りを捧げた。我が国において、神社に詣でること、神さまに手を合わせることは、自らの心を落ち着かせ、謙虚な心で虚心坦懐に、神さまに自らの意志を宣言する行為であった。すなわち、時代を超えて連綿と営まれてきた神明への「祈り」とは、「神だのみ」という他力ではなく、自らの決意表明という、まことにポジティブな側面があったように思う。

国難ともいふべき事態に遭遇した今、我々は先人たちが捧げた「祈り」の現代的な意義を再認識し、前に進むときではないだろうか。そして、戦後、民主主義国家という今の「国の形」を選択した我々は、民主的な手続きで選ばれ、国の舵取りに日夜挺身する我らが代表を批判ばかりせず、叱咤激励するとともに、苛酷な状況にある医療従事者への感謝を忘れず、国民すべてが一人一人の問題として立ち上がるべき時と思う。福沢諭吉翁の言葉「一身独立して一国独立す」（学問のすすめ）の持つ意味を改めて噛み締めながら。

さて、出口の見えない自粛が続き、閑散とした社頭にため息をつく日々を送るある日、社務所に一本の問合せの電話が鳴った。「蘇民将来のお神札ないでしょうか」残念ながらこの辺りにはその慣わしが無い旨伝えて電話を切った。この電話がきっかけとなり、私は手持ちぶさたの職員たちに疫病退散御守りの手作りを提案してみた。夏祭りでお馴染みの「茅の輪」のお守りである。「蘇民将来子孫家門」のお神札をミニ茅の輪に組み合わせ、葉には御守りの由来となった蘇民将来の説話を紹介することにした。現代人の大方は知らないけれど、かつては日本人ならほとんどが馴染んだ神話の紹介を通して、ご先祖さまたちが度重なる疫病克服のため、絶え間無く続けた「祈り」の根源的な意義を氏子へ啓発する意味を込めたかったからである。この御守りは地元新聞の報道もあり、街の小さな話題となって人々に安堵の笑顔を授け続けている。閉塞感漂う今、地域の神社がこの厄介な疫病を乗り越えるための一筋の光を届けられたなら、望外の喜びである。

Member's Voice

阿久津肇パストガバナー

今年は、各地の花だよりもコロナ禍のため、もう一つ関心に欠けるものがありますが、古来日本人が桜に寄せる思いは特別のものがあります。恒例になっている4月16日予定だった福島クラブの観桜夜間例会も残念ながら中止となりました。

桜と言えば、数多くの桜を詠んだ西行を思い出しますが、白洲正子は「西行は散る花に最高の美を見出した（新潮社 西行）」と書いていますが、一方生け花の安達瞳子は「漲りこそが花」と次のように述べています。

「山桜が好きになり、旅をすると必ず山桜を探した。毎年春に奈良・吉野山を尋ねた。人は散るまでの短さに共鳴するが、いざ咲かんとする（漲り）もその美しさは例えようもなかった。漲りこそが花、夏の青葉も花、散る葉も花、何かが一番凝集した時が花。」

外出を控えていた身は花見にも出かけず、自宅の庭のささやかなしだれ桜（三春滝桜の苗木より）を眺めながら、一日も早くコロナ禍が収束するのを願わずにはられません。

わきて見ん老木は花もあわれなり

今いくたびか春にあふべき 西行

加藤義朋会員

Q. 本当に「認知症（ボケ）」は、予防できるでしょうか？ A. 「イエス」。

私個人的に「ボケ」は、生活習慣病だと思いますから、生活習慣を変えれば、未然に防ぐことができるでしょう。

（文献：奥村 歩 ボケない生活術）

「ボケ」とは、単なる「年のせい」ではなく、病気の結果として、その人らしからぬ的外れな言動（記憶の完全欠落）が見られる状態をいいます。ですから、「女優の名前が出てこない」とか「買い物をし忘れた」といった程度のことは、本当の「ボケ」ではありません。「ど忘れ」です。4, 50代頃からはじまる「ど忘れ」や心身の不調を放置すると、印象的なことや大切なことも記憶に残らない「もの忘れ」になり、「こんなことを私が言うわけがない！」「魔が差しただけだ！」といった言動が増え、「ボケ」がはじまる。「ボケ」を防いでくれるのは、お医者様でもお薬でもなく、ご自身の生活習慣の改善です。

でも、「認知症」の早期診断・治療には「もの忘れ外来」の受診をお勧めします。

--- お知らせ ---

* 会員の皆様よりメッセージ投稿、近況などつぶやきをお待ちしております。
会えない今だからこそ、皆様のお声を是非お届けください。（文字数 200～300 字程度）

FAX：024-536-1011 メールアドレス：f-rotary@guitar.ocn.ne.jp